

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02162

研究課題名(和文) 大乘仏教の修証論をてがかりとした道元思想の総合的解明 比較思想的探究

研究課題名(英文) A Comparative Study of Dogen's Thought of Practice and Enlightenment from the viewpoint of the Theory of Mahayana Buddhism

研究代表者

頼住 光子(Yorizumi, Mitsuko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：90212315

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究においては、修証論を軸に、比較思想研究という視点も踏まえて道元思想の体系的解明をめざした。第一段階として、『正法眼蔵』本文の注解を行い、テキスト内在的に道元思想を解明した。なお、中心的に取り上げたのは、『正法眼蔵』中でも、特に修証論について集中的に議論されている「仏性」「身心学道」「行仏威儀」「坐禅箴」「大悟」「行持」巻等である。第二段階として、道元の修証論と浄土思想のそれとを比較し、それによって、道元思想の大乘仏教思想史上における意義を明らかにした。以上の成果については、国内外で発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「日本思想史上、最高の思想家」とも呼ばれ、近年、国際的にも大きな関心を呼んでいる道元思想について、主著である『正法眼蔵』の精密な読解を踏まえて、その思想を解明した。その際、道元の中心的テーマである修証論を取り上げ、構造的かつ体系的に解明した。『正法眼蔵』は難解をもって知られており、その難解さのよって立つところを解明しつつ、語の用例や、引用経典や語録などの出典を参照し、正確にテキストの意味を確定するようつとめた。また、道元思想を大乘仏教思想史の中に位置づけるために、浄土教の修証論との比較を行い、道元思想の意義を多角的に解明した。

研究成果の概要(英文)：This study aims at a systematic elucidation of Dogen's thought, based on the theory of ascetic practice and enlightenment, and from the perspective of the study of comparative thought. As a first step, the text of the "Shobogenzo" was annotated to elucidate Dogen's thought from an intrinsic textual perspective. I have focused on the volumes of the "Shobogenzo" in which the theories of practice and enlightenment are intensively discussed, such as "Bussho", "Shinjin-gakudo", "Gyobutsu-igi", "Zazen-shin", "Daigo" and "Gyoji". In the second stage, we compared Dogen's theories of practice and enlightenment with those of Pure Land thought, and thereby clarified the significance of Dogen's thought in the history of Mahayana Buddhist thought. The above research achievements were published in Japan and abroad.

研究分野：倫理学・日本倫理思想史

キーワード：道元 『正法眼蔵』 比較思想 大乘仏教思想史 修証論

1. 研究開始当初の背景

従来、道元思想は、江戸期以来の伝統をもつ宗学（開祖である道元を絶対無謬の信仰対象とした上で成立する曹洞宗の学問）を中心に進められてきた。そこでは、基本的には、自らの信仰や坐禅体験に基づき『正法眼蔵』が読解されることが常であった。

とりわけ、近代宗学において「本証妙修」をはじめとする道元理解の方向性が確立されると、宗門の内外に関わらず、道元研究に大きな影響を与えた。このような理解には一定の正当性があるとしても、より多角的、多面的な道元理解によって、道元思想の可能性を模索する余地は大いに残っているといえよう。

また、宗学と並んで、近代日本においては、和辻哲郎、田辺元ら西洋哲学研究者による道元研究も、道元理解の形成に大きな影響を与えている。彼らをはじめとする哲学者による道元思想の研究は、道元の読解に新たな視点をもたらし、道元思想を、思想それ自身として研究する方向性を打ち出した点で大いに近代の道元研究に貢献したと言える。ただし、西洋哲学の概念を道元のテキストからやや強引に導出するという傾向も目立った。

以上のような研究状況の課題に応えるべく、研究代表者である頼住は、これまで道元思想を『正法眼蔵』本文の厳密なテキスト・クリティークに基づいて、テキストそれ自身のもつ意味内容を解明することを試み、その成果を著作や論文、口頭発表、学術講演を通じて公にした。本研究においては、さらにこのテキストの精密な読解に基づく研究を、より広範かつ体系的に推進するようにつとめた。

2. 研究の目的

本申請研究の目的は、「日本思想史上最高の哲学書」とも言われ海外でも注目されている『正法眼蔵』における道元思想を、修証論（修行と悟りに関する理論）を軸としつつ解明することである。修証論は、道元思想の中軸をなすものであり、この解明によって道元思想の全体像を浮き彫りにすることが可能となる。

具体的には、以下の(1)(2)を目指す。

(1) 道元の修証論をめぐる思想について、その独自の世界把握を軸として、『正法眼蔵』の関係する諸巻を取り上げ、テキスト内在的に解明する。

(2) (1)を基盤として、大乘仏教の修証論という観点から、道元思想の思想的意義を多角的に検討解明する。

(1)に関してさらに説明すると、(1)では、道元思想の思想構造を総体として解明するにあたって、特に、道元思想の基底をなすとともに、大乘仏教の基本思想である「空一縁起」について、その文体に着目して検討した。特に、本研究では、従来ほとんど行われていなかった『正法眼蔵』諸巻における道元の文体の分析を手がかりとして、道元思想の獨創性を解明すること、そして、それを手がかりとして、道元思想を総体として体系的に解明することを目指した。

その際に中心的に取り上げたのは、『正法眼蔵』中でも、特に修証論について集中的に議論されている「仏性」「身心学道」「行仏威儀」「坐禅箴」「大悟」「行持」巻等である。古註（近代以前の宗学による『正法眼蔵』の註釈）や新註（近代以降の註釈）を参照しつつ、解釈の確定していない部分について、『正法眼蔵』の用例、文体分析に立脚した正確な読解を試み、同時に、論理的一貫性をもった註釈を行うよう努めた。その上で、修証論を軸に道元思想の体系的解明を目指した。

(2)についてさらに説明すると、(2)に関連して、本研究では、大乘仏教の思想内容の特徴を「空一縁起」に立脚した「共同成仏」と捉え、そこから大乘仏教独自の修証論が生じると理解する。これは自他の不二という「空一縁起」に立脚している。道元の修証論である「修証一等」論はまさにこの「共同成仏」「共同修行」の観点から、今、ここ、この修証の全時間空間への展開として検討されるべきものである。

この大乘仏教の「空一縁起」に立脚したダイナミズムを捉えるために、本研究においては、特に比較思想的観点に注目する。特に、同じく代表的な大乘仏教の思想家である親鸞との比較である。親鸞の主著でありこれも難解をもって知られる『教行信証』のテキスト内在的解明を基礎的作業として行い、親鸞の修証論である「二種廻向」論を、道元の「修証一等」論と比較対照することで、両者の大乘仏教思想家としての共通基盤と相違点を闡明するよう努めた。

3. 研究の方法

(1) テキスト内在的な道元思想の解明のために、『正法眼蔵』本文の注解を行う。具体的には以下の通りである。

① 諸写本を校合の上、本文を確定する。

② 古注、新注をはじめ『正法眼蔵』注釈本を収集調査して検討する。さらに『正法眼蔵』中の用例を参照しつつ本文の解釈を確定する。

③ 『正法眼蔵』の特異な文体に関する検討を行い、類型化し、その文体のパターンの把握をさらに推進する。

④以上の作業を踏まえて、中心軸となる「空一縁起」に注目して、道元の修証論をめぐる思想について構造的かつ体系的に解明する。

(2) 道元思想の大乗仏教思想史上の意義を確定するため、具体的には以下を行う。

①親鸞思想の修証論を解明し、道元との比較を行う。

②主要大乗経典や教学について、道元がどのように受容したのか、その様態の検討を行い、大乗仏教思想史に道元を位置づける。

以上の(1)(2)の研究成果を、国内外で論文発表、口頭発表する。

4. 研究成果

(1)(2)の研究成果について、以下にそれぞれ述べる。

(1)の代表的な成果としては、『日本の仏教を捉え直す』（末本文美士と共著、放送大学教育振興会 2018年3月20日 pp. 3-4, pp. 27-124, 263-267）や、「道元思想と表現」（『ひらく』第3号、京都大学こころの未来研究センター、2020年6月15日、pp. 174-183）がある。ここで後者の一部を引用する。

「道元は、「行持」、すなわち「修行の持続」について、さまざまな次元で語っている。それは、「道環して断絶せず」（輪のように途切れずつながっている）という言葉からも読み取れるように、「連続性」という言葉に集約できるだろう。道元は次の三つ次元において「連続性」を考えている。

① 自己における修行の、悟りを目指しつつ悟りを基盤としているという循環的な連続性（修証一等）

② 自己が修行する時に世界のありとあらゆるものとともに修行をするという空間的連続性

③ 自己が修行する時に過去・現在・未来の諸仏や祖師たちとともに修行をするという時間的連続性

まず、これらの三つの次元の連続性を根底的に支えているものについて確認しておこう。その際にポイントになるのは「行持」の「功德」（働き）ということである。そしてその場合の「功德」とは、自らの「強為」でも他の「強為」でもないと言われている。つまり、人が修行をしている時、たとえ自分では、自分自身の意志で修行していると考えたり、他人に強いて修行させられていると考えたりしたとしても、それは、自分が修行しているのでも他人が修行させているのでもない。自他という二分法を越えた、いわば、おのずからなる働きの中で修行が成り立っているのである。

人は、このような自他をこえた、互いが互いに密接に働きかけ合い、成立させあっている事態、つまり「空一縁起」「自他一如」の中に生きていながら、自分の執着によってそのような世界が見えなくなり、自分という何か独立した個体があると考えたり、他者と自分という二元対立的な図式によって世界を分断して捉えたりしてしまっている。

修行とは、日常的な二元対立図式、目的一手段の連鎖の世界を越えて、その働きを自らの身心において顕現することである。そこでは、本来あるところのものになるという循環が成り立つが故に、修行と悟りは一つ（修証一等）である。この修行と悟りが一つであるということ、ここでは「発心・修行・菩提・涅槃、しばらくの間隙あらず、行持道環なり」と表現している。「発心、修行」が「修」であり、「菩提、涅槃」が「証」（悟り）であり、それが「しばらくの間隙あらず」、つまり、少しの間隙もなく一体化しているというのである。そして、この「修証一等」が「行持道環」と言われる。「道環」とは、環には始めも終わりもないように、永遠に続くということで、「本来あるところのものになる」修証一等の循環が永続することをも意味する。

そして、その永続は、一個の私を越えて、全空間、全時間に及んでいく。まず、全空間的な広がりについては、「わが行持すなはち十方の市地漫天、みなその功德をかうむる。」と言われる。つまり、自分の「行持」とは、自他を超えた「働き」の顕現であり、その「働き」が「十方の市地漫天」（全世界）に広がっていくとともに、自己の「行持」は全世界に支えられているのである。前述の、釈迦が悟った時に「大地有情とともに同時成道」したという、仏教の原点とされる出来事も、まさにこの構造の上に成り立つ。自己と全世界の全存在は、ともに修行しともに悟るのである。

他方、全時間的広がりに関しては、仏祖と自己との関係を通じて表現されていく。自分に先立つ仏祖が自己を基礎づけ、また自己が仏祖を基礎付けるという表現において、時間は、通常のように過去一現在一未来と一方向に流れていく直線ではなくなる。

あらゆる時間が、修行する「今」とつながり、その「今」を支えるものとなるとともに、修行する自分の「今」が、これまでの仏祖たちが修行し、悟ったあらゆる時間を支えていくのである。」

(2)の研究成果については、現在発表を準備中であるので、その一端を簡単に示しておきたい。

まず、道元が修証一等、行持道環の修行論を唱えるのに対して、親鸞は自力の不可能性と絶対他力に基づく念仏（阿弥陀仏によって称えさせられるという意味での、絶対受動の念仏）を主張しており、これは一見すると自力對他力というようにも見えるのであるが、それは一面的な見方に過ぎない。

道元の修証も、常に世界の側から促され、自己が自覚することによって可能となるという意味において受動性を示している。他方、親鸞における念仏も、他力の念仏ではあるものの、それは常に自己の受動性、罪性の主体的自覚によって裏打ちされるという意味で、能動性、主体性を完全に無化するものではない。そして両者のこのような営為は、大乗仏教の「空一縁起」に基づい

て可能となると考えられる。

道元にとって修証一等は、上掲の引用でも述べたように、構造的に「空一縁起」に支えられている。親鸞の自覚の構造も、さらには二種廻向の構造も、「空一縁起」に基づくと言える。「二種廻向」においては、阿弥陀仏の力の差し向けにおいて、念仏者は浄土に往生したとしても（往相廻向）、浄土に安住し留まることなく、穢土に戻ってきて衆生を導く（還相廻向）。つまり、二種廻向が最終的に目指しているのは、大乘仏教の「空一縁起」の思想に根差した「共同成仏」であると言え、道元と親鸞を大乘仏教の思想家として見た場合、その相違点だけではなくて共通点にも大きな意義が見出せるのである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 117-3
2. 論文標題 禅の思想から見る「自立」 道元『正法眼蔵』から考える道元の哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『学燈』秋号	6. 最初と最後の頁 22-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 頼住光子	4. 巻 -
2. 論文標題 道元の哲学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『世界哲学史』別巻、世界哲学史のさらなる論点第6章、ちくま新書	6. 最初と最後の頁 279-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 頼住光子	4. 巻 -
2. 論文標題 和辻哲郎と仏教 初期の作品・資料をてがかりとして	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『和辻哲郎の人文学』ナカニシヤ書店	6. 最初と最後の頁 211-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 頼住光子	4. 巻 -
2. 論文標題 道元の時間論から見た円山道白における「復古」について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『日本思想史の現在と未来』ペリかん社	6. 最初と最後の頁 43-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 51
2. 論文標題 中世から近世へ 卍山道白における「復古」をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本思想史学	6. 最初と最後の頁 10-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 9
2. 論文標題 釈尊より法然へ1	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 浄土	6. 最初と最後の頁 2-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 10
2. 論文標題 釈尊より法然へ2	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 浄土	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 11
2. 論文標題 釈尊より法然へ3	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 浄土	6. 最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 12
2. 論文標題 釈尊より法然へ4	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 浄土	6. 最初と最後の頁 26-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 1
2. 論文標題 釈尊より法然へ5	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 浄土	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 26
2. 論文標題 道元の思想構造 『正法眼蔵』 「現成公案」 巻冒頭の二文の解釈をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 MORALIA	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 4
2. 論文標題 道元の思想構造 『正法眼蔵』 「現成公案」 巻と「菩提薩タ(土+垂)四摂法」 巻をてがかりとして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際禅研究	6. 最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 6
2. 論文標題 大乘仏教の思想家としての法然	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 佛教大学法然仏教学研究センター紀要	6. 最初と最後の頁 115-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 3
2. 論文標題 道元の思想と表現	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ひらく	6. 最初と最後の頁 174-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 2
2. 論文標題 倫理・道德教育の目指すもの 倫理学・日本倫理思想史研究の立場からの一考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倫理道德研究	6. 最初と最後の頁 42-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 26
2. 論文標題 和辻哲郎の思想形成と宗教 初期の作品を手がかりとして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 倫理学紀要	6. 最初と最後の頁 129-172
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 25
2. 論文標題 「和辻哲郎的思想根基：「型態」與「流動」」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『日本倫理觀與儒家傳統』、東亞儒學研究叢書	6. 最初と最後の頁 205-233
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 頼住光子	4. 巻 25
2. 論文標題 道元における「さとり」の世界とその表現 『正法眼蔵』「梅華」巻註解の試み	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『倫理学紀要』	6. 最初と最後の頁 134-183
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件（うち招待講演 18件 / うち国際学会 7件）

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 中世日本哲学と世界哲学
3. 学会等名 EAA 公開シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」東京大学東アジア藝文書院（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 道元における山林修行の意義 世俗世界と山との関係（イタリア語同時通訳）
3. 学会等名 Associazione Culturale Centro Zen Firenze（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 日本思想における「共生」 仏教、儒教、神道の観点から
3. 学会等名 素修会講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 道元の自然観
3. 学会等名 International Conference “ Does Nature Think? ”（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 道元思想構造 『正法眼蔵』 「現成公案」 卷冒頭の二文の解釈をめぐって
3. 学会等名 フッセルアーベントDogen-Workshop講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 大乘仏教の思想家としての法然
3. 学会等名 法然仏教学研究センター講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 日本における自然観の一様態 道元の自然観を手がかりとして
3. 学会等名 京都大学国際シンポジウム「未来創成学の展望」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 道元の思想構造 『正法眼蔵』「現成公案」巻を手がかりとして
3. 学会等名 三田哲学会哲学・倫理学部門例会講演(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 聖徳太子と政治～ヤマトの政～
3. 学会等名 令和元年度「聖徳太子シンポジウム」パネル(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 道元の思想構造
3. 学会等名 道元研究国際シンポジウム「世界の道元研究の現在」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 道元の時間論
3. 学会等名 時間学国際シンポジウム2018「中世日本の時間意識」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 中世から近世へ 道元の時間論から見た円山道白における「復古」について
3. 学会等名 日本思想史学会大会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 倫理・道德教育の目指すもの 倫理学・日本倫理思想史研究の立場からの一考察
3. 学会等名 日本倫理道德教育学会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 日本思想における「共生」
3. 学会等名 中國文化大学日本研究中心発足記念国際シンポジウム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 道元における瞑想
3. 学会等名 大正大学学術助成研究会：「科学における意識の問題への現象学的・唯識思想的アプローチとその現代的課題について（招待講演）」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 「日本における比較の方法について」
3. 学会等名 「全球化下の日本哲学：従東亞到世界」國際學術研討會（招待講演）（國際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 「道元の仏性思想」
3. 学会等名 宗教哲学フォーラム No. 7「日本の宗教思想と宗教的思惟からの靈性」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 頼住光子
2. 発表標題 「仏性について／親鸞の「仏性」思想」
3. 学会等名 宗教哲学フォーラム No. 7「日本の宗教思想と宗教的思惟からの靈性」（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 頼住光子（共著）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 放送大学教育振興会	5. 総ページ数 289
3. 書名 『日本仏教を捉え直す』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
スイス	チューリッヒ大学		